

【ポスター発表】

**社会福祉士「相談援助実習」における実習生の学習プロセス
—障害者支援施設における実習生のグループインタビュー調査より—**

○ 九州看護福祉大学 平川泰士 (5467)

稲富憲朗 (福岡女学院大学・8222)

キーワード3つ：社会福祉士実習、学習プロセス、

1. 研究目的

実習は、座学での学びと、実際の支援の場での体験・学びとを関連付けていき、概念化することによって、社会福祉士としての態度・技能を身につけることができると考える。本研究では実習生自身の語りを通し、施設利用者（以下 CI と略）、実習指導者（以下指導者と略）、職員、組織・機関との関係をどのようにつくり、どのように学びを深めたのかを明らかにすることで、実習における実習生の学習プロセスを明らかにすることである。本調査では、障害者支援施設における実習生を対象とし、レジデンシャルソーシャルワークとの関連のなかでの学習とそのプロセスに焦点を当てる。

2. 研究の視点および方法

A 大学における社会福祉士の「相談援助実習」を履修した実習生のうち、障害者支援施設での実習を行い、調査に同意した者を対象とした。2013年5月27日に、調査協力者（実習生）6名、6月10日に7名、計13名に対し、調査者2名のもとに、インタビューガイドを用い、グループインタビューを実施し、録音・録画により記録を行った。インタビューガイドの項目は①どのように実習先になじもうとしたのか②どのようなことに戸惑い・困り乗り越えていったのか③もっとも学びが深まった内容とどのようにして深まったのか、である。

インタビューは録音後に逐語記録のテキストデータに変換し、対象者が語っている内容の意味を解釈しながら読み込み、データを切片化した。調査の目的に沿ってデータを抽出し、併せてその意味を現すラベルを付記し、さらにラベルのなかから関連の高いものをまとめ、上位概念となるカテゴリを作成し、カテゴリを構成するものをサブカテゴリとした。

3. 倫理的配慮

調査実施前に「研究への協力の同意書」を配布し示しながら、研究の目的、個人情報保護について、口頭にて説明をおこなった。また、この調査への協力をいつでも辞退できること、インタビュー内容や協力の有無に限らず、実習・講義の評価には一切関係ないことを説明した。その後、調査への協力に同意できる場合は、同意書の署名捺印と提出をもって調査協力への承諾とした。インタビューは個人情報に配慮しながら記録・管理し、録音した記録は、逐語記録としてテキストデータに変換し使用した。インタビューにおける記録は研究・発表の終了後、破棄することとした。

4. 研究結果

逐語記録を整理した結果5つのカテゴリと13のサブカテゴリに整理された(表1)。

実習生は、実習初期においては、＜実習生と職員・指導者との関係形成＞に主眼を置き、実習生自身の日常的な他者との関わり方や、C1の生活支援に関わる職員から、その施設での身の振る舞い方、支援の方法を学び、そのまま行うことによって実習先になじもうとしている。そこで、指導者・職員からの実習生の立ち位置が作られたり、フィードバックを受ける機会などがあることで、実習生が安心して自身の経験を振り返り、C1と出会うことができる。適切なフィードバックを受けられず、関わる機会が少ないと＜実習生と職員・指導者との関係阻害＞がおき、実習生の学びの進展が立ちおくれる。次に＜実習生のSW専門職としての理解の促進＞では、実習生の経験に対して、専門職としての価値づけが行われることで、C1の行動を病・障害と個性を切り分けて考えることができるようになり、表面的なC1の行動ではなく、その背景や内面などへの気づきが生まれる。そして、実習生個人の関わり方や職員の真似ではなく、＜実習生のSW専門職としての行為の獲得＞が起き、C1の特性を理解し、合わせた関わりや対応が行われ、専門職としての関係形成が行われる。実習生は個人や集団との関係の中で、このような展開の中で専門職としての熟達を図られるが、その背景には所属する＜組織との関係＞があり、施設の抱える問題により、熟達の進展が妨げられることがあったり、他の実習生と比較することで、自身の考えや常識を整理する評価軸ともなる。

表1 実習における学びの構成要素

カテゴリ	サブカテゴリ
実習生と職員・指導者との関係形成	職員による環境づくり
	実習生の異化・非日常・異文化としての障害との出会い
	実習生のC1への非専門的関係作り
	職員の介入による内発的動機作り
実習生のSW専門職としての理解の促進	職員・指導者による実践の価値付け
	障害・病と個性と切り分ける
実習生のSW専門職としての行為の獲得	C1理解の捉え直し
	実習生のC1との専門的関係形成をつくる
実習生と職員・指導者との関係疎外	職員間の基準のズレ
	指導者による阻害要因
	実習生の立ち位置
組織との関係	施設の問題・課題
	他の実習生の存在意義

5. 考察

実習生は、実習初期においてはC1ではなく、職員を基準に行動を決めており、これまで学び得たソーシャルワーカーとしての視点や関わりを行っていない。これは、実習という場面において、実際にワーカーとしてどう動くかが身につけていないことも考えられるが、まず組織に適応することが優先されているといえる。また、組織文化との関連の中で日々を過ごしている点では、教育カリキュラムの中に、対C1を想定した内容だけではなく、組織の一員として、かつソーシャルワーカーとしての立ち居振る舞いを学ぶ必要があるといえる。